日本書紀第三十

持統天皇

逸

太政官文庫
和書門 類
特別 三二〇九九 號
第五番 函
架
三二冊

内閣文庫		
番號	和	32099
冊數		32（32）
函號	特 55	12

共卅二

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

日本書紀巻第三十

高天原廣野姫天皇　持統天皇

紅葉山本

高天原廣野姫天皇は。みいみなは鸕野讃良皇女ともうしき。天命開別天皇乃二はしらにあたりまします女なり。母を遠智娘（または美濃津子娘あり）ともうして。天皇しめやかにして大度ましくれ。天豊財重日足姫天皇三年に。天渟中原瀛真人天皇（天武）に適て妃となり。始帝王の女にましまして

秘閣図書之章

以てしも礼をこのみ節倹たまひ母それいさ
おはしましぬ天命開別天皇元年より
草壁皇子尊は大津宮にて生まし十年
の十月に沙門天渟中原瀛真人天皇に
したがひ給ひて吉野に入給ひしのち猶ことを
さとりたまふ語は天命開別天皇の紀に
くはしく見えたり天渟中原瀛真人天皇元年
夏六月あめのぬなはらおきのまひとの
をつかひにてさぐりて難を東国に

さり給ひてさはやしたひらくとはど
みなくはぬみともみそうしは侍らず然れ
どもなを他みことのありし毎にまうけきぬて
数万をくばりて詔要害の地よりかため紀
給ふ秋七月にいたていくさのさき見也座
ことの葉豪ともりしに大友皇子は殺
し御首は給て不破宮にまゐりつ二年
に立て皇后となり給ふ皇后たしめ
より今にいたるまで天皇はかくれまし弟

天下をしろしめし給ひしにみな執(つかさどり)ぬまつりあいさ
り。詩を賦し玄政事(ことはじめ)にとよんて多(さい)は
そののちおもくたびねましけり。朱鳥(あかみとり)元年
九月つちのえいぬの朔ひのえむまの日
天渟中原瀛真人(あめのぬなはらおきのまひとのすめらみこと)天皇かくれましましぬ。皇后
みかどまつりことをしろしめしぬ。冬十月つち
のえたつの朔つちのとのみの日皇子(みこ)大
津みかどかたぶけんとし給ひしあらはれて
まづ皇子大津をとらへぬ。およびとらへ

らるゝ皇子大津のためにあざむかれし
直廣肆(ちよくくわうし)八口(やくち)のあそん音橿(おとかし)小山下(せうせんげ)壹伎(ゆきの)
連(むらじ)博徳(はかとこ)と大舎人(おほとねり)なかとみのあそん臣
麻呂・巨勢のあそん多益須(たやす)・新羅(しらき)のほう
し行心(きやうしん)およひ帳内(とねり)礪杵(ときの)道作(みちつくり)ら三
十餘人をとらへぬ。かのえむまの日皇子
大津を訳語田(をさた)の家にしてみづからしなしむ。時
年二十四。妃(きさき)皇女(ひめみこ)山邊(やまのへ)かみをくだしはだしにて
はしりおもむきて殉(じゆんし)しましぬ。みるもの

兄なる弟なれば皇子大津は天渟中原瀛真
人天皇の第三の子なり容止たかゝ
さかしく音辞とくあきらかなり天命
開別天皇にめくまれ給ひてまつり給ふ長
そきまふみをよんことひしく才学は
御しきむ文筆をこのみ給へり詩賦の
おこりは大津のみこよりはじまり
むかえさうの日みこしのほとりにてなきゐて
皇子大津みくしかりふうんそんおもり

あざむかれまつる吏たびたびなり拙内を
やむことなきいかゞ皇子大津をすてゝ
わかちぬ臣下のまさきに皇子大津に坐
ねへきことのよしみかけて拙なるへし
時行のこと波はくて也は伊川のまみかつきる
又見しらつゝしみ勿ちて波ちく志つゝ天文の
沙門行心みこ大津のみことかく故ろん
務しよくをとしことも勝つと称たんこ
と志ねきいのちのこそましてるさの王乃

伽藍にうしなはれぬ十一月ひのとのとりの朔
みつのえねの日伊勢の神祠にまゐてまつれ
る皇女大来京にかへりまゐりたまへり
みつのとのうしの日地震 十二月ひのえとら
うの朔きのとのとりの日天渟中原瀛真
人天皇のおほんためにむしやたいゑを五寺
大官飛鳥川原小墾田
豊浦坂田に設く みつのえのむまの日
京師の孤独高年に布帛

をたまへりたのくえあり閏十二月
ちくしの太宰三国高麗百済新羅の
たみ男女ならびに僧尼
六十二人をたてまつりけりし蛇犬と
つるめりにはかにしてともに死ぬ
元年春正月ひのえとらの朔の皇太子
公卿百寮人等をひきゐて
殯宮にまうでてましかる慟哭たてまつり
ものまうすつかさの布勢朝臣御主人

誄(しのひこと)たてまつる。礼(や)なり。志のひことたてまつりをはりて
衆庶(もろもろのおほみたから)みねたてまつる。次にほうし(梵衆)
らみねたてまつる。こゝに奉膳(うちのかしはてのかみ)紀朝臣真
人等奠(みけ)たてまつる。奠(みけ)たてまつりをはりて膳部(かしはて)采
女(め)等みねたてまつる。うたまひのつかさ(楽官)うたまひのはりやう
ねまつる。この日皇(ひつきの)
太子(みこ)公卿(まへつきみたち)百寮(つかさつかさ)人等をひきゐて殯(もかり)の
宮にまゐりてみねたてまつる。こゝにほうしら
したかひてみねたてまつる。

かのえねの日京師(みさと)乃年八十よりうへ
およひ篤癃(やまひ人)まつしくしておのれ自存(みつからいく)
ることあたはぬものに絁綿(ふときぬわた)をたまふ。
しなあり。きのえさるの日直広肆(ちきくわうし)
田中朝臣(たなかのあそん)法麻呂(のりまろ)と追大弐守君苅田(かりた)と
をしらきにつかはして天皇の喪(みも)をつ
けしむ。
三月きのとのうしの朔つちのとのう
日をのつからまうけるたかくりのこ麗(こま)人(投化)

十六人をめしてひたちの国にはんべらし
め田たまひ稟たまひなりはひをやすくせし
む。ひのえさるの日華縵をもてうつ
みあらきのみやにたてまつり御誄をたてまつる
この日丹比真人麻呂しのびことたてまつる
る。きのえいぬの日おとのはら
まうおもむきし新羅の人十四人を
しもつけの国にはんべらし田たまひ
ものたまひてなりはひをやすくせしむ。

夏四月きのえむま乃朔えのとさんらの
日つくし乃太宰をのはらまうしたをむき
し新羅の僧尼とおほんたから男
女二十二人はむさしの国に
はんべらし田たまひものたまひて
なりはひをやすくせしむ。
五月きのえ辰の朔きのとみの日皇太
子公卿百寮人等をひきゐてあらきの
みやにまうでてこゑをあげてなきまけり

はじめて隼人(はやんと)大隅阿多(おほすみあたの)魁師(ひとこのかみ)をのく
己かともからを領て互にすゝみて誄(しのびこと)
たてまつる
六月ひのとのみの朔かのえたつの日は
罪人を赦さる
秋七月ひのとのゐの朔きのえむまの日
みことのりしてのたまはくおよそ負債(もののこひおふ)
者(もの)はきのととりのとしよりさきの物を
利(こそう)なとりそもしすでに身をはたら
かしめは利はなはたらかせそかのとのひつし
の日隼人(はやんと)大隅阿多(おほすみあたの)魁師(ひとこのかみ)ホ三百三十七人
みものたまふことおのく差(しな)あり
八月ひのえさるの朔つちのとゐの日殯宮(もかりのみや)
に嘗をそこの日青飯(あをきいゐ)をくましはるひのと
のとりの日京城(みさと)の耆老男女(おきなおみなのひと)みなたしの
はしのにしにてみなくこゑたてまつる
つちのとのうしの日天皇直大肆(ちよくたいし)ふち
はらのあそん大嶋(おほしま)ちよくたいし黄書連(きふみのむらし)

大伴としゐ三百餘家大徳あはれとて
此集をしめしく裟衆人くにいつり一机を
くりぬくまつりゐれし海にく連八天渟
中原瀛真人天皇乃御服をかくぬぎ
百なりしみそしの甲斐むとむかしく伊割
はふさにみふだうん
九月二日のえいぬ乃翔かひえむすの日さ
忌部をとこやこのてらくり没をかの
と乃むはしの日をりのこや示没故を

そのえさる乃日さてまうら王子令霜林級飡
令薩摹とし級飡令仁述大舎薩陽信
おとまうしゐまつりしと代まうしたてま
はりまさみつさぬくさしはる学問僧智隆
きうけくいぬまうはくしのみことまう
そるかた絶天皇のかくれましほと代霜
林ありしかはその日はりつんかみな喪服
はく东ありむかしゐ三ぬむたうとて三た
ひこゑのぬくまうける

冬十月かのとのうの朔みつのえねの日皇太
子まうちきみたち百寮人ならひに
諸国司国造とおほんたから男女
とひきゐてはしめて大内のみさゝきを
作らしむ

十二月かのとのうの朔かのえねの日直廣参
路真人迹見をもて新羅人に饗たまふ
勅使となれり　ことし太歳丁亥
二年正月かのえさるの朔ひつきのみこ公

卿百寮乃人たちをゐてもかりのみや
にまうてましてみねたてまつり給かのと
乃とりの日梵衆をもかりのみやにみねなく
まつれり　ひのとのうの日かきりなき大會
と薬師寺に設ます　みつのとのゐの
日天皇のかくれましましし始志つしき乃會
霜林ほうしのたまふさんさうあんにおいて
ち三たひ哭なくまつれり
二月かのえ[illegible]の朔かのとのうの日大宰府

庭乃ミゆきをかくまゆれはこかねしろか
ね・綿布・あるは縑織乃あゝむ・十餘物・
なとむみ所にみなくまゆれ佛像をさゝれ
彩絹しり・むすめたぐひ十餘種とましじ霜
林のみなくまつまれ・ちりよしろかねよ・紋色
くさしのめろしておあつせく八十餘お
あくまはまり・はちのとのいの日・霜林ホ
にはらしの館に饗食たまはりおきまふ
ことおのく労あり・おのとのえの日・先

正とのむしあかきいぬかく今ゆり拵くさ
此国忌日なりあかりむとてしるしん弁を
奉し・はちのえむまの日・霜林ホまうり
くれ・
三月はちのとのうしの朔・はちのとき
うの日・英繆をめくまりの文しあく
まつり・藤原朝臣大納言ひとたくふ
はな・
六月はちのえむまの朔・きのとのしの

日百済の敬須徳那利をとりて甲斐国に
うつす。
六月つちのえ戌乃朔つちのえむまの日
みことのりしたまはく天下の繋囚極刑
をして本のつみ一等をゆるさしめかろき
とらはれ人をはみなこれを赦す。また
天下をしてことしのみつきのなかはを
入さしむ。
秋七月ひのえねの朔ひのとゐの日
大雩して旱なり。ひのえさるの日百済の法
し道蔵に命してあまこひせさし
む。あしたならすしてあまねく天
不宗朝
下にふる。
八月ひのえむまの朔ひのとうの日もかり
のみやに嘗してみねなきたてまつる。
こゝに大伴宿祢安麻呂誄たてまつる。ひの
とのとりの日浄大肆伊勢王おほせ
して葬儀をのたまはしむ。かのとゐ

いの日耽羅王佐平加羅をまうして方物
はたてまつる
九月ひのえとらの朔きのえさるの日
耽羅の佐平加羅等つくしの館に饗
たまはりものたまふことおのおの差あり
冬十月きのとのうの朔つちのえむま
の日皇太子まへつきみたち百寮人等と
諸蕃賓客とひきゐてもかりの宮に
まうでてましゐこゝ〇たてまつりたまふこと
に奠たてまつりたまふ楯節の儛まうさみて
ちとのくおのの先祖等のつかうまつれる
しさまをあけてかはるかはるしのひことしたてく
まつる。はちのとひつしの日蝦夷九十
餘人調賦をおひになひてしのひことしたてまつ
る。きのとのうしの日布勢のあそん御
主人大伴のすくね御行かはるかはるしのひこと
たてまつる。直廣肆當麻真人智徳
皇祖等のあまつひつきの次第礼たまふこし誄
騰極

志みいしてなくまはる。伊みしへハ日嗣(ひつぎ)と
まうす。をはりて大内の陵(みさゝき)にはうふりたてま
つりたまふ。
十二月きのとゐの朔みづのえたつの日
蝦夷(えみし)の男女二百一十三人を飛鳥(あすか)寺(てら)の西(にし)の
槻(つきのき)の下に饗(みあへ)たまふ。よりて冠位(かうぶり)をさづけ
物たまふ事差(しな)あり。
三年春正月きのえとらの朔天皇(すめらみこと)万国
を前殿(まへとの)に朝(まうこ)しむ。きのとのうの日大
学寮杖(うつえ)八十枚(ひら)たてまつる。ひのえたつ
の日みちのくの国の優嗜(うきひの)曇郡(こほり)の城養(きかひ)蝦夷(えみし)脂利(り)
古(こ)が男麻呂(まろ)と鐵(てつ)折(おり)と鬢髪(ひげ)をそりて沙門(かど)
とならんと請(こふ)ことのありしてみことの
りしてのたまはく麻呂(まろ)らわかくして閑雅(みやび)なり。
よくすくなし。ついにこゝに蔬(くさびら)をくひ戒(いむこと)をたも
つ。こふところのまゝに出家(いへで)してみちをおこなはしむべしとのたまふ

て。かのえさるの日とよのあかりしてまへつきみたち
にくらゐあり袍袴をたまふ。かのとのと
りの日新羅の使人田中朝臣法麻呂等
新羅よりまうきぬ。みづのえいぬの日出雲
のみこともちにみことのりして風浪に
あへる蕃人をおくらしむ。この日越の蝦夷
ほうし道信にほとけの像一はしら灌頂
の幡。鐘。鉢をおのおの一口。五色綵をおのおの五
尺。まわた五屯。ぬの一十端。鍬一十枚。鞍一具

たゞりつくしのみこともち粟田真人
朝臣等隼人一百七十四人ならびに布
五十常うしのかは六枚しかのかは五十枚を
たてまつる。つちのえたつの日文武官人
薪をたてまつる。つちのとみの日百官
人等に食をたまふ。かのとのひつ
じの日天皇よしの宮にみゆきします。きのえ
いぬの日天皇よしのよりかへりたまふ。
二月きのえさるの朔。ひのえいぬの日尺

ことのりしたまひてつくしの防人(さきもり)としの
かきりみちたる人をかへたまふ。つちのとのとりの日。
浄広肆(しやうくわうし)竹田王(たけたのおほきみ)。直広肆(ちきくわうし)土師乃すくね
根麻呂(ねまろ)。大宅(おほやけ)のあそん麿(まろ)。ふちはらのあそん
史(ふひと)。務大肆(むたいし)當麻真人(たきまのまひと)桜井(さくらゐ)。ほつみのあ
そん山守(やまもり)。なかとみのあそんの臣麻呂(おみまろ)。巨勢(こせ)のあそんの
多益須(たやす)。大三輪のあそん安麻呂(やすまろ)をもて判(ことわり)
事(つかさ)としたまへり。

三月つちのとのうの朔ひのえさるの日。
大に天下をゆるしたまふ。つねのゆるしに
ゆるさゝるものはゆるしのためしに
あらす。

夏四月つちのとのとりの朔かのえとら
乃日。投化(まうおもむける)新羅人をしもつけの国
にをらしむ。きのとのひつしの日。皇太子(ひつきのみこ)
草壁皇子(くさかへのみこのみこと)尊かくれさりましぬ。みつの
えとらの日。新羅より級飡(きうさん)金道那(こんたうな)など
まうして瀛真人(おきのまひと)天皇の喪(も)をとふらひ奉

なさし給りなりしに学問ありし明聴叡智
ほとなくあまたまつり列にありし称の阿
陀乃みかた金銅のくわんおんぼさつかんぜおんの
かた大勢至ぼさつの像をのをの一はしら
綵帛にしきあやなどおほくたてまつる。きの
え亥りの日、吉日王みこまとかれ。流らのを
乃とりの日、諸司にみえしものはらして仕丁
一月十四日極めりし給ふ
又月えりのとりうしの朔にえいあの日

土師宿禰根麻呂をしてかの新羅のしぎれの
ようしやうたれば、級飡金道那等にみこと
のりしたまはく、かれまつりしとの
はかなるこのましの、まつ池勅をうけたまはり
ゐのみなりしものまつりしし二年に田中朝臣法麻呂
等をまうらして天皇の喪をあはい告
さしめし時、新羅まうさく新羅乃みことのり
みりうけたまはるの人たかりしうけ蘇判位
ありし極令まゐまたおとくさんと申す

そこにおもふらく法麿(のりまろ)ぬ宣(のりと)しまをさみ
ふるの里は昔ともむかしともしきしまの
事を伝へぐむしし難波(なにわ)の事よりおほし
ましましし天下志ろしめしし天皇かんさりまし
しこれ巨勢(こせ)輪(かなおか)おはしましして要(えし)とは
華さしむれ日騎倉(えうさん)全春(えんしゅんてい)林兄しかるを
うけおほしよりおも志りそと藩判(そえん)とてみ
ふるの里はうけおほりりにしまうさく守
れるにさこれの事よりおほく有なり文

近江(あふみ)のおほやみ天下志ろしめしし天皇のかんさり
ましし時むかしの昔滄(うさん)金薩(えんさつ)儒ホとまを
しおほみつむかしおほくまうしむ志るれを
今級滄(こうさん)はおほくそのひおほくまいれよ
おほ前(さき)の事よりおほくありまをく新羅(しらぎ)おほとよ
つましまをしおほまをく我国(やまと)日本の台(とこ)
皇祖(こおや)の代より船とおほへ織(うづ)とかきたし
おほはくおほくまつりし国なり志るれ
と今一艘(ふねのあらと)まうし故典(ふるきのり)みおほくなり文まうし

ゐまうけく日本（やまと）の遠皇祖（とほすめろぎおや）乃代（みよ）より清白（あきらけき）
つばすくきよくぬくゝまつりてたまへみそ
まあさて称をきよくし本職（もとのつかさ）より官揚（のぼせあげ）し
かばきよれこゝろをやぶりゆがけしきて
奸媚（まきこゝろ）しゝ成かしむこの極へつり詞賊（こつきまの）と別（こと）
ぬ女くまつつまれものとなりしひ正ゆい
くさめくおくくまゝ志まい我国家（みかど）乃
遠皇祖（とほすめろきおや）の代（みよ）よりひろく汝（いまし）ともをとめて見給
し濟くぬ極（こゝろさかし）へうゝれ破（やぶ）り得まくしきとめ下よ

くたくしこたゞりにしてまりくとその職（つかさ）
任とおさめゑ法度（のり）は志てゝひゑくまりり
羅んをのて天朝（みかど）まもり傳まてくひろく免
ゑ見たまへ乃こ汝乃那（いましたち）等このみこと
おうし給つるこしと給うけゑむりゆく汝王（いまし）
ゐみくゑくまつる
六月こ川のえむさの朝衣裳（こさめ）をはくしの
太宰（みこともち）等はくゑかなたこ川のしれ宮達し
乃日白皇子（みこ）施基（しぎ）直底雄佐味（さみ）乃あそん宿那（すくな）

麿羽田のあそん斉 勤廣肆 伊余部のむま
し馬銅 調忌寸老人 務大参 大伴のすくね
手拍 巨勢のあそん多益須 など
これしえらひ給ひ かの孫
乃日を經こしの鏡ち云蓮江格ありしを
たまへりとのく 若あり かのとつらしの
日太宰粟田真人のあそんにみえしあり
しるらのたまひいつし 明聡親留ほと
おくりそはす これの師友よまさなく

一百四十行をあらためり このとしえんの日つく
し乃小部に新設のしうひしたりひ令道邪
にお役あさひ 勘たまふしとのく 若あり
かのえいぬの日 諸司にりし 令一部二十二巻を
まうちたまへり
秋七月かのえいぬの朔 みちのくの蝦夷出つ
自此ほまうもて 石乃金銅の佛の
みくく観世音かのみことのく 一軀
安寶帳香炉幡等の物をそへたまひをなり

あり。この日新羅(しらき)のみつきたてまつる。今道那(こんどうな)
たてまつりてけり。そのころの日左右京職(ひだりみぎのみさとのつかさ)
ほうしひらきてのみこしめしけんとあり
しるす。刑部(ぎやうぶ)の不代はりしむ。かのとの
みのとしの日、備前(きびのみちのしり)のかみ他の国あふみ川の
こゝろみに人。柏原(かしはばら)の廣山(ひろやま)をときの国より
なされ。遺(つい)廣参(ひろさん)をとらへ、備前(きびのみちのしり)廣山(ひろやま)をと
そへ人なれ。備(とより)生部(いくへ)のむしし庇(そう)より
さいもとさぶらふ。秀のえやのの日、被(う)のえもし

八物(やつりす)黄なとなりたまへとおのゝく。差(しるす)あり。
秋八月かのとのえの朔、こよいのえむりの
日、百官(つかさ)神祇官(じんぎくはん)にあつまられいりて
天神地祇(あまつかみくにつかみ)のしるしに宣(のり)たまはく、これより
そのの日、天皇よりしめしつくやうしらくまれ
むかしそのの日もとかとりまさすことに、ほ
のち武庫(むこ)のうらのうち、一千あまりのうらのさの國所提(あて)
のこかり那孝(る)事(の)二万須(しろ)いがのの国伊がのこ
かり身(む)事(の)二万須(しろ)より伊賀まりめぐりめぐく

守護人とさためしくかき池の出大宮乃ふ
あらる脚の海ありたまへしぬ。ひのとの
利の日。また池こゝにみなちりたまふの好よ
しとのく花あり。かのとのうしの日。伊
豫乃總領田中乃おとゞ清麿おにみこと
乃あとし海みく海もくさね、さの出帥城
のこりみえてあらし白鷺ようしくなる
ちかみたし。こいのとのうの日。鋭村
国八月かのとゐの朔かのへさるの日。諸国
月みえしとのあらしおみてく海ちく今冬戸
備法にあへしようしゆ九月とうあり
浮浪とあひしとまぬるしその兵士を一國と
みつよこうりあまの一をとさこめくく武のと
とあうりしめよ。ひのとゐうしの日。浄廣肆
内生をはくしの大宰帥とうしさ杖たけ
たまひとよむおや少あり東廣嗣とおもく意
廣武冊は乃まう人将ぬさい河おもく封一百ゑを
ましあなりかよし

九月かのえたつの朔つちのとのうしの日
直廣參石上朝臣麿直廣肆石川のあそ
ん虫名らをつくしにつかはしてくらゐの
記をたまはりまして新城を監なはしむ
冬十月かのえさるの朔かのえさるの日天皇
たかやすの城にいてましぬ かのとのひつし
の日ちよくくわうし下毛野のあそん子麿
奴婢六百口をゆるさんとおもふよしを奏
すまうしみゆるされ

十一月つちのとのひつしの朔ひのえいぬの日
市中に追廣弐高田首石成か三の兵を
閑ひしをほめて物たまふ
十二月つちのとのうしの朔ひのえさるの
日双六を禁ましめやむ
四年の春正月つちのえとらの朔物部麿の
あそん大盾を立つ 神祇伯中臣大嶋朝臣天
神の寿詞をよむ をはりて忌部宿禰色夫知
神璽の剣鏡をきさきにたてまつりつい

つぎのしろしめさるゝ公卿百寮はしくなまりあ
れうきよくまいるよりはちのとものの
日まつりこさんゐゐはうさく朝おりくるとき
むつきのついたちの儀のごとくひのし丹比将
まひと人と布勢の主人朝臣と勝梧よろふ
ことまうして かのえたゝりの日まうれいにも
よ内裏にとよのあかりし給 そのえさるの日
まうさとしたゝり内裏にとよのあかりし給
よろく夜宴しかるへり 公卿の日百寮

薪をたてまつる きのえむまの日大りう天下に
ゆるさせたまふ たゞしつみの極おもきものはゆるさ
れす ゆるす例にあらず 位ある人に爵一級
たまへり 鰥寡孤独篤癃まつしくてえさ
らぬものにはものをたまひ 調役をゆ
るしたまふ きのとゐの日解部一百人を
とく刑部省にめしそ かのえねの日幣帛を
ちはやふのあまつやしろくにつやしろにあからまさ
しとし 神戸田租をましたまふ

二月つちのえさる乃朔みつのえ祢乃日天皇
腋上の陂にいでまして公卿大夫のむまを
とみそなはれ　はちのえむまの日新羅の
ほうし詮吉級飡北助知ら五十人帰化
きのえ祢の日天皇よしのゝみやにいでます
ひのえとら乃日おほうちに設斎を　みつの
えさるの日まうおもむきししらきの韓奈末
許満ら十二人をむさしの国にをらして
しむ

三月ひのとのうしの朔ひのえたつの日京と
うちつくにの人乃とし八十より上なるにも
乃み嶋のみやのいね人ことに二十束たまへり
その位あるものにはぬの二端をくはへたまへり
夏四月かのとのゐの朔つちのとのとり
乃日使をつかはして広瀬のおほいみのかみと
龍田乃かせのかみとをまつらしむ　みつのとの
うしの日京と畿内との耆老耆女五千三十
一人にいね人ことに二十束たまへり　かのえさる

乃日みなとりしてけふは百官の人と
もに禁内の人々ことごとくあかねのわさとりなし
位うけたる七年とりきりてその位かさねて
此日をはしめく九等にえらひさためて
天武より上たしくは孝德の時のそのまゝ冠
切結ともいふかそれの大小をもとゞりく
冠位を換んとてみかしに服は浄大参より
下つかた広弐より上はたゞしは絹しも浄大
参より下つかた広肆より上はたゞしはあかし

らさき正八級はあつむしさき直八しかいは緋勤
八級をかつゝんより務八しかをあさそらう追八
級を深縹と八しかをあさら別に浄広
弐より上はさいは一幅一部の綾羅等をさくしよ
から極はこと成中をも浄大参より下つかた直
広肆より上つかたは一幅二部のあやをもちゐ
させまちかまへしほかにはまとしは緋の上
下かよりしもちゐよ帯白袴そのかかはつ緋の
しはちのえ西川の日ちしめく而西形

是（これ）を旱（ひでり）なり。
六月癸卯の朔。はちのえこうの日。天皇
よし野の宮より帰りまします。ひのとゐの日
百寮（つかさ）乃男女二十一人まうけをもて。かのえさる
乃日。はしめてみやこにしめて。安居講説
二月ひのえむまの朔。かのとゐの日。天皇く
はとりに行まく。かのえむまの日わかち禄
を位あるもの級めしてあまねくたまふの次いそして
年業（よはひ）とことを唱知。

秋七月みつのえ禄の朔。まうれ見え多地。百寮（つかさ）人
等にしめてみいしまさみこころもさう。はち
乃しとらの日。幣（みてぐら）を天神地祇にしあはせ
多し給。かのえ多川の日。皇子（みこ）高市（たけち）とも
多太政大臣（おほきおほいまうちきみ）となし。正広参（しやうくわうさん）をもて丹比真（たぢひのま）
人りさりをもてみきのおほいまうちきみとなし
あらためらしひに八省（やつのまつりこと）百寮（つかさ）みなましたまふ
かのとのみの日。大宰国司（みこともち）これまけましまふ
こ川のえむまの日。見えとかりし多あり

公卿百寮たゝみくろあるとのし今より
杯くされ家乃内ゐく胡服をきて門
あらさるはぶり条上しめよをこし
首を文門よまゐりて朝服をれ年あき
乃しさるの日みとゐりしてゐきゆべく
たしてみしくろあの人より兄拝ふり
親王をはよのし〳〵大臣と王しれまり
是ましくのみたく二王より上はさ八くろ
よりなりゐひさ給つ事はちの里風しの日

兄とみるし年の始めく朝堂庭上にみ兄
たまいく大臣いしれい弐部くひさ施给
この日絶綿綿布とりく七ろの安居の御つ
三千三百六十三ありとかりたまふ列ありひ
清さのみことのみてあみ三ところの安居沙門三
百二十九人とくあたまふ。えいのとの兄の
日使を設まうして廣瀬の大忌神と龍
たの風の神とを祭まつらしむ
八月このとのとの朔清ちのえさきの日天皇

よし野のみやに行幸まします。このとしの八月の日

まうけものたまふこし新羅人ともをすくなくもつを

の国におくらしむ

九月ひのとのゐの朔。諸国司等にみことのりしてのたまはく

しもつかたゝちて戸籍つくらんには

戸令のまゝたり。これのとしの日みんなと

のたまひしにまゝ。朕このくにをめぐり

いくさにしたがひをも破しそのみやこの

田租口賦などをやめよ。ひのとのゐの日天皇

のをかく行幸ましき。このとしの日かへりたまふ

大唐学問僧智宗義徳浄願軍丁筑紫の国の

上陽咩郡大伴部博麻とともに新羅のつかひ

大奈末金高訓にしたがひてつくしに

うちいたる。みづのえいぬの日。天皇きのみやよ

りかへりたまふ。

冬十月きのえたつの朔つちのとのひの日

天皇よし野のみやに行幸ましぬ。きのとの

うしの日。かみつしものまつりことをきこしめし智宗

等こゝにいたる。はちめしむきの日。使をつかはして
まうしてはなしの太宰河内王等にみこと
のりしていはく。新羅のおくりつかひ大
奈末金高訓ら。郷倉を学生土師のすく
ね甥らをおくりまつりしとひとしくひの
ねぎらへてまた。ねぎらへものたまはゞ
こと一みなしの里乃やそのまにく。このたひ
うしの日宮丁陸くしの國上陽咩郡の人大伴
部博麻によりてのたまはく天豊財重

日足姫天皇七年に。百済をすくふえだちに汝
もろこしのいくさのためにとりこにせらる。天命開
別天皇三年にいたりて土師のむらじ富杼
氷連老。筑紫の君薩夜麻。弓削の連
元宝児四人もろこし人のはかりことを
きゝてまうさんとおもへども衣粮なきによりてはた
さゞることをうれふ。こゝに博麻土師富杼らに
かたりていはく。われいましとおなじくして本朝にまう
でんとおもへども。衣粮なきによりて

ともみえ侍らざりしを我身をとゞめてこれ
と衣食にあかくん爵禄に将麻かくしゝのゐに
みしむしけなくさつりぬ此比むらし
をひとのくらりしくまゐらして今に三十年朕
かのみたしとなりしこゝ国を定ておのがさとう
ある忠なるこゝろをあらはしはらつる故
婚大嫌のむかしより絶ゆることなく一十比丘の三
十調に一千米水田四町をくはへてその公田と
曽孫まで子孫三族に課役をゆるしをかれてかく

かくのごとくにありしはのえさるの日高市帝
皇子太政大臣のこゝろやとしのくらとみそなはして公卿百
寮みなかしこまりてみなたてまつれり
十一月きのえさるの日もつりの朔かのえとらの日とゝのつ
りむ金銀の剖簿みたてまつれるものたまはるとのく
ありきのえさるの日みこのりとりけおほやけ
をしめぐり元嘉の暦と儀鳳のこよみとはしめ
十二月きのとのとりの朔きのとの日ととく
天皇は金銀の別あきたりたる貴のしそう

この日天皇よしのゝみやにいでましぬ。きのえ
さるの日天皇よしのよりかへりたまふ。かの
とのとりの日天皇ふちはらにゆきまして宮処
をみそなはす。公卿百寮みなともにしたがふ。
くわうきのとゐらしの日まうちきみたちより下
はうくわんにいたるまでにうたげしたまふこと差あり。
五年春正月ひのとのとりの朔親王諸臣内
親王女王内命婦等にくらゐをたまふ。
かのとのうの日まうちきみたちに飲食衣裳

をたまふ。倭正広肆百済王余禅広直大肆遠宝
良虞とならびに南典とにおのおの差
あり。きのとゐの日封をましたまふ。皇子
高市に二千戸、さきに通て三千戸。じやうくわうに
皇子穂積に五百戸。浄大参皇子川嶋に百戸、さき
に通て五百戸。しやうくわうさん右のおほい
まうちきみ丹比嶋真人に三百戸、さきに通て五百戸。
正広肆百済王禅広に百戸、さきに通て
二百戸。直大壱布勢御主人のあそんと大伴

乃紗(こゆき)のちくらとに八十戸あはせ通ハ三百戸
そのやう封(へひと)さへをことたのく差(しな)あり亦のえ
いぬ乃日みことのりして此くのちく亜広肆
はしのうんひと益はくしのみこと太宰わちのつ
りきのかん典ましまみおほりこのつ今より二十
九年あきらいをえまめす誠をとりくあへてみ
ねさしをなの少人は食封みそ戸絶十丈すきさ
二十文化ぬの年むしういて年米あみならり
はちの人祢の日天皇よりみてよりいはくまたこの
のむはじの日天皇よしみくさよりくつ給
二月のえみつの朔天皇まちきみたちに
みことのりしてのたまはく卿等天皇の世よ
佛殿經藏をつくりて月ごとに六斎をおこ
なへり天皇ときどき大舎人をつかはしてとひ
たまふ朕が世にもまたかくのごとくせむ故つとめて
こころをもて佛の法をうやまふべしこの
日宮人に位記を授たまふ
三月のえさるの朔きのえいぬの日まちきみ

みくちに西乃さつりおこしのりとよのあかりし
給ふむのえ孫の日天皇は松乃ミ代御苑より
にんそみかれ これのとしのみんの日みなしみりし
をれいしゆへくたしたまへんになるあかりて中
兄のためにうるまになりは百姓言にしたへしり
子父母のになめようしれしたるは賤にめしたる人に
准貸借に賤なり没たるはたけんなりしに志
ありくその子奴婢に配りといふときにきまる
みかみ言のり志てさく人

夏四月かのとのうしの朔みえとのさるにての
たまもくよし氏祖の時にゆるされし奴婢
をなくに籍のぞりきなしわその眷族まし、
うけくにみな奴婢たりとゆるされ大宅
のもののせこ村主そこそこり大税一千束たらひ
あみりくその学業をとめさりとて かのとのうし
日使をなましして廣瀬の大忌神とあろ
あのをのせ乃神をまつらしむ ならしのあの日
天皇よしみてえみといくまへ これのえいぬの日

天皇とうしめくこやまひしり給ふ

五月かのとの亥朔かのとのうしの日百寮(くらう)

の淳武(ぢゆんむ)親子(こし)がけのえさかのくらゐのわたくり(切)

とおもく長大参(ちやうたいさん)のくらゐの代をかうつりわ

西絁布(さよみの)をたまはり

六月京師(みやこ)とよりひでりして(旱)しもとろ西(?)みなもと

まりはちのし祈の日(祈雨)みとのかしてれは海

らくこの夏陰霧(おめ)ふにおやさまてりたそらく

さらあれなりをいとやふらん夕(ゆふべ)ぬいくつ西

おし西よりくらまてくうまへたそまてかの行(おやまり)

ほかりふそも公卿百寮(まうちきみたちつかさつかさ)人等(たち)に拾得(ひろひえ)とて酒完(くい)(令)

を仰まひやめくへは下あやまりを悔さ

しむ　京とよひ畿内(うちつくに)のてらくのおりしらしを

ほい(?)ますさに又日頼(?)をともし[illegible]こい祈らつく(?)ゝ福(?)(読経)(梵)(流)

あらんと祈　四月より西うりさの月すりて

まり　げちのとれ亥ほしの日大(?)より天下に

げこ枕(?)のし給ふ西し盗賊(ぬすびと)を枕(?)放(?)ちあと(赦)(例)

にあらん

秋七月かのえむまの朔みつのえさるの日すめらみこと
よしのゝみやにいてましぬ。この日伊よのみ
こともち田中(たなか)のあそん法麻呂ら宇和(うわ)のこほり
御馬(みま)山のしろかね三斤八両鏂(あらかね)一籠(こ)を
奉る。戊(つちのえ)寅の日まへつきみたちに
よのあそひしたまふ。さかむにいたるまて（みそ）きぬ
かゝかゝりたまふ。おのゝ（しな）あり。かのと
みの日天皇よしのよりかへりたまふ。ひのえいぬ
の日つかひをつかはして広瀬(ひろせ)の大忌神(おほいみのかみ)とた
つたの風神(かせのかみ)とをまつらしむ。

八月かのとのゐの朔つちのとひつしの日十八
氏
大三輪(おほみわ)・雀部(さゝき)・石上(いそのかみ)・藤原(ふちはら)・石川(いしかは)・巨勢(こせ)・膳部(かしはて)・
春日(かすか)・上毛野(かみつけの)・大伴(おほとも)・紀(き)・阿倍(あへ)・佐伯(さへき)・采女(うねめ)・
穂積(ほつみ)・阿曇(あつみ)・平群(へくり)・羽田(はた)
にみことのりしてその祖等(おやたち)
の墓記(おくつき)をたてまつらしむ。かのとゝりの日
みつかひをつかはしてたつたの風神しなの
の須波(すは)水内(みのち)の神をまつらしむ。
九月つちのとのみの朔みつのえさるの日
音博士(こゑのはかせ)もろこしの続守言(しよくしゆけん)薩弘恪(さつこうかく)書(て)博士
くたらの末士善信(まつしせんしん)にしろかね人ことにはたち

なり。人二十あまり。そのとしの日。しやうあい
きん皇子かいし薨。かのとのうの日。正大弐
とゐく佐伯のすくね大国に贈さまふ
ひみちゑわりの事あり。
冬十月つちのとゐぬの朔日。蝕あり。きのとし
のみの日。みことのりしてめしのぼせて
先皇の陵戸をふりにきよけこのかりの
王等にたまはりあそばしひとまに云々を弟こし
陵ゐりしては。百姓はなくおそくその所をつよ

ふし。三とお一ゐしかりく給らせ。かのえいぬ
の日。畿内をよび。諸国に長生地たなく一千あ
とおうふ。この日天皇うし狩の家に伊くさ
そ。そのとらえの日。天皇よし狩よりかへり給
ひのえ称の日。侍をおしきて新京を
いちいまつしむ。
十一月みちのえゐしの日。大嘗祭。神祇伯中臣の
あそん大嶋。天神のよしとまふ。こいのえ
ゐいの日。まちなとたらみつきてさしを為つり。

きのとの亥はしの日・まうときみな地より下つかさ、
主典よりいてうまうく饗たまひありなましひり縫
あはたうたりとのく禄あり。宮のしもより
乃日・神祇官長上より下はらく神部まいて、
れまうく饗ぬまへとしいそのしにはうくま
はうてりよのかたに、呼そのくに乃郡司より下
はりく百姓男女よりいてうまうく、みな絹と
たまつりおのく禄あり。
十二月つちのへいぬの朔つちのとゐの日醫博士

むらいさん徳自珍呪禁乃はかせ木素丁武沙
宅万首みなあらかせをあわたり、人ことに二十あ
まのしゃんの日。みをわりしてゐさゆるく
みさのたはいさはらくみな宅地四町
もうたより上はりくる二町・大参より下つかへ、
みな一町あまつり、勤より下つかへ、ちゝれは人
そりていゑその戸口のまにまにくそのと戸あり
一町・中戸みな半町・下戸あたる四分みつけて一まは
とまきたちきよなさく

六年春正月辛のとのうの朔ひのえむまの日皇子高市(たけち)に封(へひと)しくはふること二千戸、おみ通ハ三千戸、みつのとのとりの日に他きみたちに饗(こあへ)たまふよく衣裳(きぬ)あまたまへり、つちのえさるの日天皇新益京の路(たちち)をみそなはす、みつのえむまの日公卿(まうちきみたち)より下初位(うゐかうふり)より上つかたにいたるまて饗たまふ、みつのとのうの日天皇高宮(たかこや)にいてましぬ、きのえむまの日天皇宮にかへりたまふやまりへり給

二月ひのとのとりの朔ひのとのひつしの日諸(もろ)官(つかさ)にみことのりしてのたまはく、三月三日をもて伊勢にいてまさんとす、やくこのこゝろをしりて諸衣物(もろもろのきもの)をそなふへしとのたまふ、陰陽博士(はかせ)法蔵(ほうざう)道基(だうき)にしろかねたまふこと人ことに二十両、きのとのうの日刑部省(うたへのつかさ)にみことのりしてかるきつみをゆるさしむ、この日中納言(おほいものまうすつかさ)直大弐(ぢきたいに)三輪(みわ)のあそん高市(たけち)麿(まろ)ふみたてまつり

なほへらくかしこまりして天皇の伊勢にいて
ゆきんとしたまふをもつて農の時をさまたけます
ことをいさめまうす
三月ひのえうまの朔つちのえさるの日浄広
肆広瀬王直広参当麻真人智徳直広
肆紀朝臣弓張らをとゞめ守官とし
なし給ふに中納言三輪のあそん高市麻呂その
かうぶりをぬきてみかどにさゝげてかさねて
まうしけらく農作のときは車駕うごかさせたまふな
といふ。かのとひつじの日天皇いさめにしたがはず
つひに伊勢にみゆきします。つちのとうの
日すぎます所の神郡をよび伊賀伊勢志
摩国の造らに冠位をたまひ、ならびに
ことしの調役をゆるしたまふ。供奉騎士諸司
の荷丁かりみやつくるよほろにもことしの
みつきをゆるしたまふ。大に天下につみをゆるし
たまふ。きのえさるの日すぎたまふ例にあはしたまふの日志
摩の百姓男女としし八十よりかみなる者に稲を

なり。冬十二月に羊来。それのとしのみかど日東加ゝみよ
くりまゐおりしまうそしにとれもちふ郡縣の吏
民をまうけとくにに督胥たちをのしかひてうら
まひなさしめ給ふさのえむまの日みことのり
したまふこえんのおかりみすいとをたらしこ本乃
国よりはうりまいれる。むまのりはしの戸へ
とをいふくしの蕃斗納言けるてのし
乃ちいきはなれさる。みことのつゝしてて天下に令
して百姓のまつくいさましめのに稲と男

よ三本女より二本あまりあり。
夏四月むのえさるの朔ひのとのとりの日大使
乃ち孫友国に太大貳乃ちくゐ孫をとく
たまふかしみと贈つりしのあまなり。かのえ孫
の日宮幾内のたはんあしの乃ひよかろとれし
まいれもみとしの調役をやめしまふ。こさのえ
とらの日みはうひとをましてしあまふ廣瀬の大忌社
神と龍田の風神とをまつらしむ。ひのえいぬの
日に諸王親王より下つかさに廣嫌よりいなる

まくみなふこの大鞆の鐸をなりなりとあく
花あり。かみえさの日みこのつとしてみこさう
ちくおよそ膽囲尼一みみか捧りしおくり。
六月さのとのうしの朔かえしむさの日河相乃
利文みれさうしまん。時よみを揀えんさの生むろ
乃こありの人。河古志河頭河瀬麿ふ兄弟三
戸井十年のうりきくきくのえくらを取
おさるまうさ捜拗八人つりみとしのうぶ
献けるさる。かのとのえ乃気侍しの日さうとの生刺赤

鳥乃鵄二隻をさくまつりくれ浦のこなりよ獲
とまうしゝて。気のえ祢乃日らし雅のこやよ兆
また。かのえ乃川の日。車駕文みえくりたまふ
うのとの九の日。大史とまうして福えんとして
ゐあり山岳瀆をとふつりみあさしらて。この兄
さうの日。文兄寸智徳みちよくみいちのくう
か代悟たまふすらしひみ贈物をたうなり。大巻 家
とのいの日。しやうつきうし 浄廣嫌 粗皮玉等をまうして。
京の文地をきつ川めまつらしむ。かのえうの

日ことにおもとをまいらしむ幣を当伊勢大倭すゑ
の元紀伊の大神にたてまつりて新宮をたて
吉なり
閏四月さのとゐのはしめの朔ひのとみの日大
水ふりしいとまうしむ郡国をとめくありけり
東貸賣宮ありてもろもろかしとあくへらを
の山林池沢にいるをゆるし給へとし
むみなとありし京師とよひ宮殿内よにん
くさまのやうしきやう給ひしむ はちのゑいぬの
日沙門観成に絶十足さらに三十色ぬのやら
綿なりまたかかはぬにまろ鉛粉をおなみ
きのとのひはしの日伊勢太神天皇まうり
したまへく伊勢のみむれいしのとつきしける
よろしまへとよひさとかの二柱のこみより
輪右糸三十みやとんしより給へにそ
の代を折し さのとみとりの日はくしのみ
宰のる河内王木に みことのつらしてなさす
まくまうしをかつきと太陽とあ多くにまき

して仏教(このり)ひろまりけらし。また大唐(もろこし)よりきたく
まゐりつる大使(おほつかひ)郭務悰(かくむそう)近江大津宮(あふみのおほつのみや)
にあめのしたしろしめしし天皇(すめらみこと)の御ために阿弥陀(あみだ)のみ
かたの像(ざう)をつくりまつり。
六月きのえさるの朔のえさるの日郡国(くにぐに)の
長吏(このかみつかさ)よみしれるをもてたのくになる山谷(さこ)
の穢(わい)をはらしむ。このえいぬの日長吏(このかみつかさ)とのまつりごと
しとまうしあへず。宮内(うちつかた)よりいでてあまつこと
をさしむ。このえさるの日直丁(つかへのよほろ)八人に官位(つかさ)を
たまひ、かの大内(おほうち)の陵(みささぎ)たてまつりし時勤(いそし)みてた
こたへまつりしを賜あがらへ。これのともがら
の日天皇(すめらみこと)みなそらしの京(みやところ)をみそなはしたまふ。
秋七月きのえむまの朔きのえひつじのひ君
日本天下に大赦し給ふ。十五ぬ
をもしたまふ。ゆるされて御手(おて)におかれ、さがみの国司(みこともち)
布勢朝臣(ふせのあそん)色布智(しこぶち)御浦(みうら)のこほりの少領(すけのみやつこ)
とおかしたまへ。あるへ麻呂(うさのきみ)麻呂楊(くそ)とにて
めとりしものなりてみうらのこほり

三年乃調役(こうつき)ゆるさる〳〵　かのえ猿乃日まちつかさ
みくちみとよ乃あつまて、こ月のえとうし乃
日吉野より伊賀にまし〳〵、このえとらの日に
うつせとまらして廣瀬(ひろせ)と龍田とをまつらしむ。かの
とのとりの日車駕(おほみくるま)還りたまふ。この懸(けい)
織(こ)と彗星(せいせい)と一丈の内にあらはれひかる
おほとれも没してあいちつきあひさ莬こ(名)
と四遍。
八月こ月のとのいの朔きのとのうしの日ゆるし
ゆるさるつちのとみうの日おそり(おそり)乃宮女の田(あまり)
荘(ところ)に伊せくまし、その日にやみえたり
九月こ月のとのとりこの朔かのとれうしの日班田
大夫等(まへつきみたち)を四畿(うちつくに)内にまつらしむ。そのえむさの日
神祇官(かんつかさ)よりまうしてりんたくの(弥)数(玄)を四巻(まき)
帰(うぎ)九ケ(ところ)とし(本有下)あまつ一ケくあまつかこ月のとれうし
乃日伊勢のかんしもら泰来二年たてまつる
琉(こう)前國司(みこともち)白鉄(ひっちろかね)をおほくまいらせつちのえ
の日みとしのかしてれて海より白蝋を角麻(つかう)

のたまひ浦上の濱よりえひすを放射と習餃
科をまし婦人と二千戸茶よ通もて
冬十月こそれしいぬの朔こ川のえさるの日出雲
の婦人史部これ郡丑むくをうしのくちひをさう
茀よ宮よおよ沙つとありて新羅よりをの
なうへり こ川のとのとりの日より野の文ょ
いくまれ かのえるのの日東加る文りし人
至紀
十一月かのとひつじの朔みづのえいぬの日新羅
より級滄朴信達金除蓮ホをまうしてこ
れをまくまうつしきみまうこさんと擬をし
使直廣耕息長真人むまけ大貳川内忠寸連
ありなるそのたまひ はのく差ありかの
ものとのの日新羅の朴慍達み難波の館より
饗あへしをさかのたまへり
十二月かのとみのとりの朔さのえいぬの日参将
士志くし捲きんさうむりかくみ水田をたま
婦人よ賜さのえさるの日南史ちらに成ますして

新羅乃みつきをいつゝの社に伊勢すみよし
紀伊大倭菟名足にたてまつらしむ
七年春正月かのとのうの朔みつのえたつの日
浄広壱を高市皇子にさづけたまふ
しやうくわうにを皇子長と皇子弓削に授
けたまふ。この日みことのりして天下に令
して百姓に黄色乃衣奴に皂乃衣を服よ
とのたまふ。ひのとのとりの日まへつきみたち卿に饗し
給ふ。ひのえのうまの日京師をとこ裁(?)の位
とし八十より上なる人にひとりに一匹絁二疋
わた二屯布四端なりたまへり。きのとのみの日正
広参乃くらゐを百済のこにきし善光に
贈りたまふ。ならびに賻物たまへり。ひのえのむま
の日京師の男女乃とし八十より上なるとまづし
きものきはまりたるにぬのをたまふこと乃
しな有り。船瀬のほうし法鏡に水田三町
たまへり。この日漢人等あられはしりを奏し
けり。

二月かのえさる乃朔みつのえいぬ乃日新羅よ
り王子沙飡金白面韓奈麻金陽元なとまうて
きたるよしの喪をつけまうてき使
つちのえ乃日造京司衣縫王なにかれの
つかさなといひて尸をほりうつむつちのなかしの
日まうけ新羅人牟自毛禮二十七人を
ふみ憶遍木に付させたまふ
三月みつのえねの朔日蝕ありきのえむまの日
大学博士ちやうかうにみ三村を百済よ食封二十
戸くはへしめりくくらし儒世のみちをあかめたまふた
まふこのしはすの日よしみ文よみそ
つちのえ祿乃日画大武葛原のおほきみ大鴻り
なすり物をなりたまふこの日天皇よ
将のえしもきたりゐまきのえ乃日新羅
にまうさんと擬をし侯画廣嗣たちならびに
佛りとれる勅大武なほとものくら子君
等をいひのあらはし弁通神叡なりき
ぬりたさぬのはたまふたのく若あり。まき

新羅王(しらきこにきし)にたまはりもののかずなり。かのえむま
の日みことのりしたまひて天下をして桑紵梨(くはからむしなし)
栗蕪菁(くりかふらな)等の草木を勧殖(うゑ)させしめてもて五(たな)
穀(つもの)をたすけしよ
夏四月かのえさるの朔のえ禄の日大夫謁者(まちきみあまうし)をつかは
して諸社(やしろ)にまうでて雨(あましこひ)をせさしむ。又大夫謁者(まちきみあまうし)をつかはし
むをまうして廣瀬(ひろせ)の大忌(おほいみ)の神と龍田の風
の神とをまつらしむ。かのとのみの日みことの
りして内蔵寮允(くらのつかさのまつりごと人)大伴男人(おほとものをとこ)ぬすみとみをのよ依(よ)りて [贓]
二階(しな)を二しなくたり見任官(いまつかさ)を解(と)く
典鑰(かぎのつかさ)置始(おきそめ)多久(たく)と菟野(うの)大伴(おほとも)とまたぬすみと [被]
みによりて一しなくたりつかさを [見]
とりき監物(おろしもののつかさ)巨勢(こせ)邑治(おほぢ)は物をおのれ
に入ずといへどもしりてぬすませしよりてそこは [任]
める故(ゆゑ)に二階(しな)くたりて見任官(いまつかさ)をとかる。しか
れども置始(おきそめ)の多久(たく)は壬申(みつのえさる)のとしの
いくさ役(えたち)にいそしみつかへたれは赦(ゆる)したまふ [勤労]
ただし贓(ぬすみとみ)は律(のり)によりてはたらしむ

五月はちのとみうし乃朔よりし将のこやり
いてませし　ひのとの亥はしの日天皇よりし将
乃こやより入り給ひ　ひのとゐうの日右慶大令
城内裏に設してけり
六月はちのとみつの朔　みとのゑし
百済の王敬福を従四位に　この
えたの日ちらくはらしとめて引田のあそん
広目守君苅田巨勢のあそん　まろ葛原
胡にほ麿巨勢のあそん安養次たちこの

まうし池守紀乃あそんまろ七人にさうけたまふ
秋七月はちのとの禄乃翔さのえむまの日より
みこえうり帰くませし　はちのとの亥の日仕え
給まうし広瀬乃大忌神と龍田の風神と
ささつらしむ　かのとみうしの日大史謁ひ給まさ
し百諸社にまうして祈雨せさしむ　ひのと
りうの日ま秘さみ謁ひ給まうして読れにまう
し諸雨せさしむ　この日天皇よりし将よりへ
かえりたまふ

八月きのえむまの朔。藤原宮地より仰く
ましぬ。きのとゐの日。吉野の宮よりかへりましぬ
はちのえうまの日。車駕宮にかへりたまふ
九月きのとのいの朔日蝕あり。かのとのうの
日多武嶺にいでましぬ。みづのえうまの日を
かへりたまふ。文よみ入り給。きのえの日清御
原天皇のたいらんにあたりまつれたりとは
たまふみやみ没したまふ。そうの人々しくしゆ
あしやる。きのえうしの日。直広参のゑね

ときく数屋尺寸木間に贈たてまつりかへはよ
くうりての家にて。こはのえさるのかし
の贈物のいたるをはし給ふ。
冬十月きのとみの朔。つちのえむま日。
みしとのをしめて親王より
下つかさを経みいつまく兵の
もののとみそのいさんとぬさまに浄冠より直
広にいたりて人人に甲一領太刀一口弓一張
矢一具綿一枚鞍馬勤冠より直冠にいたりて

を人ふたりに曲池一口楯こ一つり矢一よろひ納を
ひとくのことくあらしめ給へくろ。諸ちの
とのうの日ころしめて仁王経を百国つくよ
御しむ習よし給たりか。
十一月きのえいぬ乃朔かのえとらの日よし野
乃えとりいくまん。かのえ子の日秘社
の王子依東より寺庵をみとまたのくに
ひ。きのとのひ清しの日まつみてしまりか
なり給。つちのとのいの日かへりし済兵若樹は黄
ふとまうし給ところにあまての国益次のとか
ひとの醍家とのまうし給ふ。清ちのえさるの日
藤大縄とことく。藤広嗣ひとく女のあそん少麿
みさる給たまふまく合封五十戸給へり。
十二月きのえ子の朔ひのえし称の日陣清将士
とましして諸国みとし。へかへりん
八年春正月ことのとみとう乃朔きのとのいぬ乃日
正広嗣とのくちかくなしいつら布瑛部臣御さ
人と大伴のもく称れ給ふとにさらい給たまふ封

まし給ひし人に二百戸を前に通て五百戸なり
並に氏上と定めり かのとのうの日まうちきみ
を池に饗たまふ ひのとのいの日山影にて
ま川叔 かのえさるの日百済人に饗たまふ
かのとのとりの日漢人瑞をたてまつりしかば
まうてゝ又位をたまふと許して村を かのえと
らの日六位より下つかさ人を四日めしく
たりぬ かのとのうの日ころもを給ふ人瑞を
たてまつる きのとのみの日藤原宮ゆるされし

此の日京に入給ふ きのとのひつじの日広瀬
鎌等のくらゐをすゝめ給ふ人七人と赤慎の
人二人とに授給ふ ひのえさるの日より
雅のこやみに伊くまん
三月きのえたつの朔日日蝕あり きのとのとり
の日ちよくのなし 大宅朝臣麻呂 正ん 大弐
あかの王子八腹 萬書のむしん宮おほして
く添移日に拜て きのえむまの日みことのり
志くみて給ひてあしてて位人とをくつこ

み經と廣武とまうしし大伴よさみるとを大弐を
とらくもちかいつらやしそこみ採とのたまふつらのとれ
いの日みそしのつうしてみつゝ湧つくこゝてみ七年そし
乃ついみこ川のと乃えんのとしとまうく醴泉あつこ
の國益須乃こほり都賀山にまうそりやましいやし
とをやまひてもなやしつてもいやさとしのあるを
しかれは田四町めの六年場入てやさとのこほり
乃こしの調役くるくのえるしいゆるし屋
め國司以よりみんひとみいてたまへくるわ

一志ふちてめしむ楚のくしめく醴泉よりさる
しあかりしとの葛野羽衛百濟のちからて女よ
こえぬ二之ぬの十山り鍬十口あつりたり このと
乃との日みてくらし紙屋ろくよるくまつ
れ乃むのえむすの日神祇官のいより祝部を
いくりまく一百六十四人りきぬのたまふ
たのしくあり
夏四月うめしとこの朔法ちのえむすの日しや
う大しのくるあはれくはくしのみことあら

のちに河内玉祖に贈位しひなしいに勅使をたてら
れり。かのえさるの日よしみなくなりけれ
むのえさるの日こつしむとまうして広瀬のお
ほいの神と龍田の風神のまつりをはじめらる
のとのいの日天皇よしみなくなりやまうて給ふ
かのえむまの日律師道光ゆるされて物贈た
まふ。
八月にはのとのひつじの朔かのえねの日
まへつきみたちに内裏に饗たまふ。三月のと

との日金光明経一百部をもて諸国に
とくとれつるしむ毎年の正月の上玄にあ
まねくよみたまはしむその布施そのくにの
おほやけのものをもちゐよ。
六月にはのとのうしの朔かのえさるの日紀
の国更荒の郡より白山鶏をたてまつる
はらはらのこほりの大こやつこ小こや川こ
位人ありしをもてかうぶりひとしなを物たう
なりけんりまうけれにすくえさうひと取調の

こやほこ韓国(からくに)よりたてまつりしゐみかむなかり
なり。
秋七月こゝのとのむほしの朔ひのえいぬの
日巡察使(めぐりこうし)をくにくに(諸国)ゝつかはす。きのえのと
ゐの日うちひとまうして廣瀬(ひろせ)の大忌神(おほいみのかみ)と
たつたの風神(かぜのかみ)とをまつらしむ。
八月こゝのえ孫の朔はちのえたつの日皇女(ひめみこ)
花ゐ乃たなみ。沙門(ほうし)一百口度(えで)せしむ
九月こゝのえむまの朔。日蝕(ひはえ)あり。きのと

のとりの日よしのくにやまいくまれ。こゝのと
のうの日淳廣蜂(ぬかたのおほきし)三船王(このみそ)ほどくほくしめ
太宰(みこともち)のうちに沫(あは)をて。
冬十月かのとのゐの朔みのえむまの日。大蜂(しんらし)
乃くにもかくことく白蝙蝠(しろかはほり)えたるひとありたの
ゐ葛城(おつき)乃ぶりりの国郡。才日(とひ)まてたまひて
たゝしいみこゝろむね。まつ四民。めのおほむさう(塔)
あいりその戸乃課役(おほせつかひ)ゆるしてをりてゆく
ものゆるし給ふ。

十一月かのとのみの朔みづのえむまの日殊死よ
已下つかさ赦し給ふ
十二月かのえいぬの朔きのとのうの日菟原宮
にうつりたまへり　みづのえむまの日
百官飲おほみきたまふ　つちのとのひつじの日親王
より下つかさこゝやはらまで絁綿布
たまふことしなのおのおのあり　かのとのとりの日
大史
九年春正月かのえさるの朔きのえさるの日
装束をとく皇子舎人よそほひきをたまふ
きのえいぬの日まゐきみたちあそぶよ内裏に
饗たまふ　きのえむまの日薪をたてまつる
きのとのひつじの日百官人等にあへたまふ
みかえたる乃日衬を冒みしておはします
閏二月つちのとのうの朔ひのえいぬの日より
雅のうみ　伴らくまへ　みづのとのこの日
車駕るふりにしたまふ
三月つちのえさるの朔はちのとのとりの日彩

羅より王子こんらうりん補命薩飡ぼく
かうこくおよび韓奈麻金周かんあや乃さん
ちうせんおはしまして国政をまうしき
またみつきたてまつりものたてまつる。つちのえ
むつしの日よし野の宮にみゆきしたまふ。みづのえ
いぬの日天皇よし野よりかへりたまふ。つちのと
うの日務廣貳文忌寸博勢さんくわうさん下訳語
諸田らを多褹にまうして蠻のゐるところをもとむ
夏四月つちのえとらの朔ひのえいぬの日に

ひをまたして廣瀬のおほしの神と龍田の
風神とをまつらしむ。きのえむまの日ちよくすらく
さんのこゝろをもとなる賀茂のあそん蝦夷に贈
たまふ。くらゐしひよ贈物をまつり。直大肆を
わくあや乃いみき赤麿ふつ贈たまふしひな
贈物をまつり。
五月ひのとひつしの朔つちのとひつし
乃日隼人大隅に饗したまふ。ひのとう
の日隼人のすまひを西の槻乃下にてみ

くるなり。
六月きのとのうしの朔はちのとのうしの日大史
禍者をましらぬ京師とよはひつのうちつく
みの諸社よまゐりて請雨祈らしむ。これの文
なりの日まちきみなき絶のとし八十より
こえたるしをよはひ痾疾ある人とにたまもの
のたまふことたのしく君あり。そのえひさ
の日よし都のこやりいくまれ。これのえさの
日よし都の文よりくる給。

秋七月きのえむまの朔はちのえさるの
日使をましらぬ廣瀬の大忌神と龍田の
風神とをまつる。かのとのひつじの日新羅
みまらさまんと擬としこつかはし西度蝶
小野朝臣毛野務大貳伊吉連博徳よ
やまとふしたのしく君あり。
八月きのえいぬの朔つちのとのいの日うつ
都よ仰くまれ。このしれ凡の日よし都よ
アるくりたまふ。

九月ひのとのうしの朔つちのえさるの日獄
徒慧極おほし然かのえいぬの日小野乃あそん
毛野不新羅ニ発向
十月きのとゐの朔きのとのとり日菟田吉
渡して伴くまへ宮めしいぬの日まれしい
ましらくり然
十二月きのえいぬの朔つちのえとらの日より
野のこやすり伴くまへ宮めしいぬの日よ
し野よりくり然　律大使酒潮王聘把しらう
なり
十年春正月きのえうまの朔かめしいぬの日
また他このえうまのらニ饗たまふ　きのえこうれ日
亜大使のちうちをめして〳〵のおほきみ南典
すり換ニ給まふ　つちのえもうまの日れ紫綬
なまつり　つちのとのひつじの日まかつさみ
もた他百寮人等ニ饗給ふ　かのとのとり
の日またやきこゝたちつかさくの門よ村を
二月ひのとのとりの朔つちのえいの日より

せの宮に伊くまし。ここのとのとりの日よし
野よりかへり給ふ。
三月ひのとのうの朔きのとのみの日。二槻
の宮にいでまし。きのえとらの日。越後
の蝦夷し伊予部武志し。未於の忘言守
蝦夷ともにみしるのきぬたり。ゆいとふる風ぬ
とのふ狄ありけり。
夏四月ひのとのうの朔ひのとのとりの日。使
をたまうしこ。廣瀬の大忌神とたつ
の功れうことはまたなしむ。つちのえいぬ
の日。追大弐のくらゐをさづく。伊よの国よりさえ
やへかへり把頭し。肥後の国よりしのちから
壬生のかはりしたにさづけたまひあしぎぬ
むとりて。絁疋。絲十絇。布二十端。鍬
二十口。いね一千束。田四町あまりひとつ戸の
ことばし極むくし。久しくかはらう
乃くみてもしみてし。試慰たまふ。
はちのとのいの日よし乃こやみいでまし。

五月きのえうしの朔みづのとのとりの日みこと
のりしてのたまはく大将上(たいしやう)たちのむらじ(連)につかへまつり
姓(かばね)をたまはるひとゝゐときにすとなさる。きのとのうしの
日よしのゝみやにおはします。つちのとのとりの
日直広肆(ちよくくわうし)のくゝみをたまはりて尾張(おはり)のすくね
大隅(おほすみ)のしまをみやこにおくりて、みな田畑
所をたまはりぬ。このとしのたつの日ちよく
し乃くにのあはせのまゝに大狛(おほこま)のむらじ
百枝(もゝのえ)に贈(おくり)たま(玉)ふ。ならびに賜物
たまへり。
六月かのとのうのついたちつちのえ(辰)の日み
よしのみやにいでます。みづのえさるの日よ
しのよりかへります。
秋七月かのとのとりのついたちの朔日蝕(ひはえ)あり。みづの
えうまの日、人(ほと)をつかはさる。つちのえさるの日
使(つかひ)をつかはして広瀬(ひろせ)のたいみの神(かみ)とた
つたの風神(かぜのかみ)とをまつらる。かのえいぬの日
後皇子尊(のちのみこのみこと)薨(こうせ)ぬ。

八月かのえむまの朔このへむまの日筑総を
のそかるゝ多治比みさいゆきたまふ
むかしいみ捕へありひてちしめまもちてさゝ
ひたくまつりし功をうて関さまふれ
事はおわたまふ。
九月かのえ祢の朔このえとらの日筑大宰
ところく桜部のあそん右岩瀬贈た
海ひかしいみそありとのあらひくあそて
しめさりきさいまつりし功をあかし

給ふ。
冬十月はちのとみの朔このとれとりの日
右大臣丹比真人に寿杖をたまひてそお
致[仕]く海りりと言へ。かのえとらの日假り
正広参のくらゐを右大臣たちこのまうとに
たまへり。資人一百二十人をたまふ
大納言阿倍のあそん御主人、大伴のあそ
ん御行にいたしひは八十人。筑総をい
そのかみのあそんまろ。筑総式はゆるさる

のあそん不比等にはなつしいみ五千人
十一月はちのとのいの朔はちのえさるの日
太政大臣のおくり出し弁通りし食封二千戸
あてたり。
十二月はちのとのえの朔みつのとのへしてん
元明帝をとりそしめ毎年十二月晦日
浄行者一十人度をゆるし
十一年正月にみえあめ川の日まちかき見
きちみみあへたまふ。はちのえさる朔日

天下の鰥寡ひとりもの篤癃まつしくて
みつからいきることあたはぬもの
あまたのく栗あり。三河のとれうしの日戸
ちこさく多代つきくしく饗給ふ。
二月きのとのうの朔きのとのしもとの日。正廣壱
あいこのまうし國見候をみくみとのしやれ
おほいそくしつきしなし。正廣参みちのまうと
頭見をとのくすんこの文やの大臣とあし。正大夫
巨勢朝臣麻呂をもとしたり。

三月みづのとのとりの朔きのえいぬの日。王遮大
令を書史(かんこのおや)に没たまふ。
夏四月みづのとのとりの朔はちのとのゐの日が
娣りたまふべきひと。伊位より正位に
いたるまでにとのしく差(しな)あり。このみさうの日
より雅のこやりほくまん。はちのとのえのう
の日こうひをまうして。廣瀬(ひろせ)と龍田(たつた)と
をまつらしむ。このひより始まりてまつり
給ふ。

五月みづのえさるの朔。きのとのうの日。大変
謁者(もののまうし)をまうしゝむ。諸社(やしろ)に遣して請雨
せしむ。
六月みづのえとらの朔。ひのとのうの日。つみ人
を放される。かのとみの日。すなはち
しゝ京幾(みやこうちつくに)の諸寺(てらてら)にして読ましむ。
かのとゐの日。五位より上をまうして京の
寺にまうしひれしめしむ。きのえさるの日。
幣(みてぐら)を神祇(かみがみ)にあかちまつり給ふ。かのとゐ

うの日。またおほきにさいゑおこなひてさらしめく。
天皇(すめらみこと)のおやまひのためにあめつちにいのらしむ。
ゐ佛像(ほとけのみかた)をつくりまつり。このとしのうの日
大[illegible](まうさくしのまうし)をまうしてゐやしろくにまつり
ゐて請(あまこひ)ゐをとらしむ。
秋七月さのとのひつちのえの朔かのとのみのひの
日。郡(くぬち)常(ひたち)鍛(ぬ)盜賊(ぬすびと)一百九人をゆるし給ふ。
よく布(ぬの)を人ごとに四端ゐたまふ[illegible]
稲(いね)を人ごとに二十束。ひのえのとりの日使者(つかひ)を
まうしゐ廣瀬(ひろせ)と龍田(たつた)とをまつらしむ。
このとしのいの日。またおほきに百寮(つかさつかさ)仏眼(ほとけのみまなこ)を
開(あけ)しつれ。會(をかみ)を藥師(やくし)寺に設(まう)く。
八月きのえうまのついたちの朔。天皇(すめらみこと)おりゐましてを禁(おほ)
中(うち)につかさめしく。ひのえのみこにくにたち
たまふ。

宮 太子 後天皇位 築

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan